

集団随伴性による自閉症児の社会的スキルの促進と般化に関する条件分析

The effect of group-oriented contingency on social skills of children with developmental disorders

○五味洋一・野呂文行

Yoichi Gomi and Fumiyuki Noro

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

(Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)

Key words: group-oriented contingency, social skills, autism

【目的】

相互依存型集団随伴性に基づく小集団指導において、自閉性障害児の社会的スキルおよび自発的な相互作用の促進、般化のための条件を明らかにすること、強化単位の異なる活動における効果の違いを比較検討することを目的とした。

【方法】

1) 参加児：以下の4名が小集団指導に参加した。

	性別	学年	診断	検査	対人行動の特徴
A児	男	4年	PDD	FIQ55	積極的な援助や応援/負けず嫌い
B児	男	3年	PDD	FIQ82	相互作用が少ない/攻撃的な表現
C児	男	2年	自閉症	FIQ68	相互作用が少ない/自己刺激行動
D児	男	2年	自閉症	FIQ79	逸脱が多い/文脈に合わない会話

2) 標的行動：(a) 自発的に生じた相談/応答、質問/教示の正反応数、(b) 各活動における行動項目の自発的な遂行率、(c) 自発的な相互作用の始発と応答の生起率を従属変数とした。

3) 活動内容：『ボール入れ』は、ペア同士で競う活動であり、ペア内でボールの種類等について相談/応答することを標的とした。『ことばさがし』は、全員で協力して目標を目指す活動であり、答えが分からないときに質問/教示することを標的とした。また、2種類の般化課題を実施した。一方には相談/応答の機会を、他方には質問/教示の機会を含めた。

4) 実験デザイン：(1) ベースライン：標的行動に対する介入は行わずに活動を行った。(2) モデル・教示条件：各活動の開始前に、モデルの提示とリハーサルを実施した。(3) 相互依存型集団随伴性 (GC) 条件 I：相談/応答および質問/教示、個別の行動項目の反応の正誤を評価し、参加児ごとに指導者が視覚的にフィードバックした。『ボール入れ』では、勝利ペアに強化子を与え、標的行動の正反応数が基準を上回ったペアにも強化子を提示した。『ことばさがし』については、全体で見つけた単語の合計数が目標を上回れば全員に強化子を与え、標的行動の正反応数が基準を上回ればさらに強化子を提示した。強化子は自作の台紙に好みのシールを貼ることとした。結果のフィードバックは、各活動が終了した後一括して行った。(4) 相互依存型集団随伴性 (GC) 条件 II：相談/応答および質問/教示の遂行を、ペアまたは全員を単位としてフィードバックした。フィードバックは1試行ごとに実施した。また、課題開始前に標的行動の正反応をイラストで教

示したほか、A児の問題行動に対してレスポンスコストを導入した。(5) 般化プロンプト：般化課題を実施した。標的行動についての介入は行わなかった。

【結果と考察】

B児の標的行動と行動連鎖遂行率の推移を Fig.1 に示した。GC 条件 II では、すべての児童の遂行率が高い水準で推移した。これは、結果のフィードバックが1試行毎になり、単位が個人から集団へと単純化されたことによる効果と考えられた (涌井, 2003)。なお、A児については他児の妨害など“負の副次的効果”が確認された。これは、『ボール入れ』における競争随伴性 (小野, 2005) の制御によるものと考えられた。また、『ことばさがし』では指導の効果が限定的であり、強化単位の違いによる効果の差が認められた。今後の課題として、困難を示す随伴性のシミュレーション場面としての小集団指導の開発の重要性が示唆された。

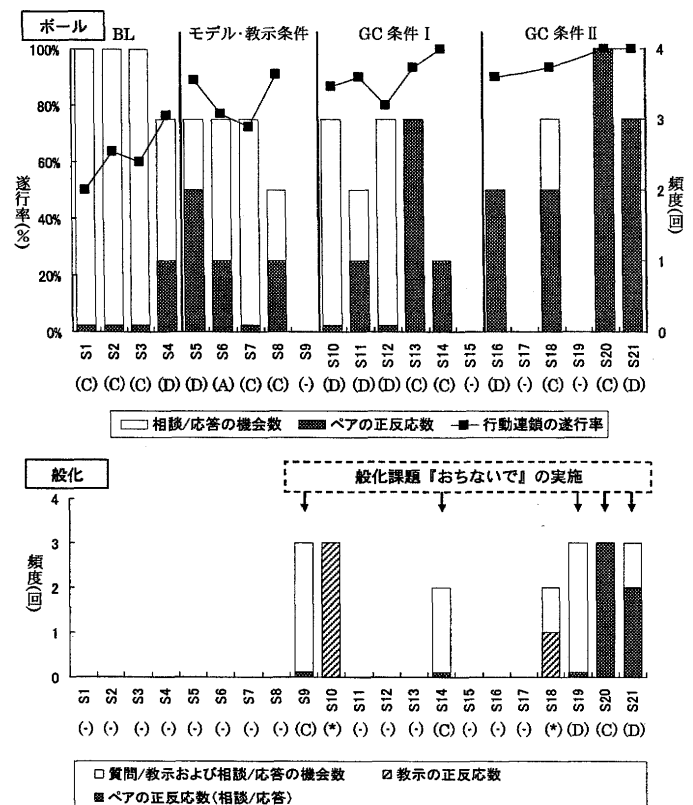


Fig.1 B児の標的行動の推移

【引用文献】

- 涌井(2003) コミュニケーション障害学, 20, 63-73.
小野(2005) 行動の基礎, pp321-326. 培風館.